

面影山古墳群発掘調査概報

— 面影山89・90号墳の調査 —

1991

鳥取市教育委員会
鳥取市遺跡調査団

鳥取市文化財報告書 29
 「西条山・古墳群とその周辺遺跡」正丸良義

頁序	行 番	地圖	図
例 言	4 (ルビ)	しようれんじ	しようれんじ
例 言	4 (ルビ)	こちゅや	こちゅや
図版目次	図版 4-1	西条山遺跡	西条山遺跡
図版目次	図版 8-1	西条山遺跡	西条山遺跡
1	10	丘陵主稜線上	丘陵主稜線上
4	13	当面の遺構	当面の遺構
8	Nd76出土遺物	(高环型)	(高环、三型)
8	Nd77埋葬施設・遺構	箱式石室	箱式石室
8	Nd78出土遺物	墨模	墨
8	Nd80出土遺物	埴丘・墨模	埴丘・墨
8	Nd80出土遺物	焼製品	焼製品、瓦
9	7	採集されていない。現在	採集されており、現在
9	9	1985年(昭和50年)	1985年(昭和50年)
10	28	一部にカツカ遺存	一部にカツカに遺存
18	17	木棺の側面剥から	木棺の側面剥から
18	25	2点組みあう形で	2点組みあう形で
22	(室内すべて)	墨模	墨
図版 4	1	西条山遺跡	西条山
図版 8	1	西条山遺跡	西条山

※お手数ですが、訂正をお願いします。

序 文

鳥取市内には数多くの原始・古代遺跡が存在しており、近年の各種開発事業の増加とともに発掘調査が必要となり、消えていく遺跡も増えています。しかしながら、埋蔵文化財は地域の先人の生活を語る歴史資料であり、後世に継承していくべき市民の貴重な財産です。このような認識のもと、鳥取市遺跡調査団では開発と文化財の共存をはかるべく、関係各機関の指導を得ながら埋蔵文化財調査事業を進めているところです。

さて、今回市道大代正蓮寺線改良工事に伴って発掘調査を実施しました面影山古墳群の発掘調査事業も、ここに無事所期の目的をはたし報告書刊行のはこびとなりました。調査では方墳2基を発掘し、当地域の古墳文化の一端を明らかにすることができました。ささやかな冊子ではありますが、市民各位ならびに関係各位のご利用に供していただければ幸いです。

調査に際しましては、地元の皆さんをはじめ関係各機関のご理解とご協力を頂きました。最後になりましたが、皆様に心から感謝申し上げる次第です。

平成3年3月

鳥取市遺跡調査団

団長 田 中 哲 夫

例　　言

1. 本書は鳥取市教育委員会の指導・監督のもと、鳥取市遺跡調査団が実施した、面影山89、90号墳の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査を実施した古墳は、鳥取市正蓮寺字小糸屋221、字範圓214に所在する。
3. 本書に用いた方位は、遺跡分布図、面影山古墳群分布図を除き磁北を示し、レベルは海拔標高である。
4. 発掘調査によって作成された記録類及び出土遺物は、鳥取市教育委員会に保管されている。
5. 発掘調査の実施にあたっては、下記の関係者、関係機関の指導と協力をいただいた。
井関忠彦 治部田史郎 西村繁昌 船井武彦 山名 嶽 鳥取県教育委員会 鳥取市建設部土木課（順不同、敬称略）
6. 本書の執筆・編集は、調査参加者をはじめ多くの方々の指導と支援を得て山田真宏があたった。

本文目次

序文

例言

Iはじめに	1
1. 調査に至る経過	1
2. 発掘調査の経過	1
II位置と環境	2
III面影山古墳群	4
1. 古墳の分布	4
2. これまでの調査研究	9
IV発掘調査の概要	10
1. 面影山89号墳	10
2. 面影山90号墳	17
Vおわりに	20

図版目次

図版 1	1. 調査地遠景（北から）
	2. 同近景（北から）
図版 2	1. 調査地全景調査前（北から）
	2. 同表土除去後（北から）
図版 3	1. 面影山89号墳調査前（南西から）
	2. 同表土除去後（南西から）
図版 4	1. 面影山89号墳西側周溝断面（北西から）
	2. 同土壙（土坑）検出状況（北東から）
図版 5	1. 面影山89号墳土壙 1 完掘状況（北西から）
	2. 同上壙 2 完掘状況（南西から）
図版 6	1. 面影山89号墳土坑 3 完掘状況（南西から）
	2. 同土坑 4 完掘状況（北東から）
図版 7	1. 面影山90号墳調査前（東から）
	2. 同表土除去後（北東から）
図版 8	1. 面影山90号墳西側周溝断面（北西から）
	2. 同主体部検出状況（南東から）

- 図版9 1. 面影山90号墳主体部完掘状況（北東から）
2. 同主体部内遺物出土状況（南東から）
- 図版10 1. 面影山90号墳主体部内遺物出土状況（北西から）
2. 同（北東から）
- 図版11 1. 面影山90号墳主体部内器台出土状況（北西から）
2. 同勾玉出土状況（北西から）
- 図版12 1. 面影山90号墳主体部内鉄製品出土状況（北東から）
2. 同高杯出土状況（北東から）
- 図版13 1. 面影山90号墳主体部内出土高杯
2. 同鉄製品
3. 同勾玉

挿 図 目 次

第1図	鳥取市南東部遺跡分布図	3
第2図	面影山周辺遺跡分布図	5, 6
第3図	面影山89・90号墳地形実測図	11, 12
第4図	面影山89号墳上塙（土坑）実測図	13
第5図	面影山89・90号墳墳丘遺存図	14
第6図	面影山89号墳墳丘断面実測図	15, 16
第7図	面影山90号墳墳丘断面実測図	15, 16
第8図	面影山90号墳埋葬施設実測図	19
第9図	面影山90号墳出土遺物実測図	20

表 目 次

第1表	面影山周辺遺跡分布図対照表（1）	7
第2表	面影山周辺遺跡分布図対照表（2）	8
第3表	面影山89・90号墳調査一覧	22

I はじめに

1. 調査に至る経過

今回発掘調査を実施した面影山89、90号墳は鳥取市正蓮寺に所在し、JR鳥取駅南方約2kmの面影山丘陵の南東側に位置する。発掘調査の契機は鳥取市建設部土木課の計画する市道大代正蓮寺線道路改良工事計画によるものである。

この市道は、面影山丘陵を横断して大代地区と正蓮寺地区を結ぶ生活道路として計画され、昭和61年度から事業着手されている。事業計画段階で土木課から鳥取市教育委員会に連絡があり、さっそく現地の確認を行なった。その結果、丘陵主稜線および今回調査を実施した支稜線上に古墳の所在を認めた。その後、これらの古墳の取り扱いについて市土木課と協議が行なわれてきた。この間、路線の部分的な変更が行なわれ、兵陵主稜線上の古墳は現状で保存が可能となった。しかし、大代、正蓮寺側とも家屋が密集しており大きく路線を変更することが困難であり、支稜線上に位置する2基の古墳は、発掘調査が避けられないものであった。このため、工事によって削平される古墳について発掘調査を行うこととなった。しかし、鳥取市教育委員会・鳥取市遺跡調査団では、当時津ノ井遺跡群・広岡古墳群などの多くの緊急を要する発掘調査を実施しており、早急な対応は困難であった。このような状況の中で、平成元年度には協議も無い、平成2年度に支稜線上の2基の古墳（約1000m²）を対象に発掘調査を実施することになった。発掘調査は、鳥取市教育委員会の指導、監督のもと鳥取市遺跡調査団があたった。

2. 発掘調査の経過

今回の発掘調査は平成2年10月1日から開始し、資材準備、搬入ののち、立ち木の伐採、下草刈り、調査坑の設定、水準点の移動といった下準備を行ない本調査に取りかかった。

調査対象地である市道計画地南側の小尾根上の正確な古墳の数と規模の確認、そして表土除去範囲の設定のためにまずトレチ掘りを行ない、これによって調査地内の古墳は2基で、そのうちの1基は調査地外に続くものであることを確認した。続いて、確認した2基の古墳（89、90号墳）について順次表土除去を行ない、その後各古墳の主体部およびその他の遺構の検出、掘り下げを行なった。同時に各調査工程ごとの実測、写真撮影等を行ない記録を作成した。今回の調査では、調査範

囲や地形の制約があり排土の捨て場所に苦慮し、また盛土、流土、埋土の違いの見極めや主体部検出にも苦労したが、10月末には近くの白ゆり保育所園児らの来訪を得るなどなごやかなうちに調査が進み、同年12月5日には資材等の撤去を行なって現地での調査を終了した。

なお、12月初頭に現地説明会を行ない、地元の郷土史研究家など約30名の参加を得ることができた。



発掘調査説明会風景

Ⅱ 位置と環境

面影山古墳群は、鳥取市の南東部の岩美郡国府町との境界に近い鳥取平野に位置する面影山と呼ばれる独立丘陵上に立地している。面影山は北西～南東方向に主稜線を延ばす、長さ約1.3km、幅約0.6km、標高110.3m、水田面との比高差約100mを測る丘陵で、JR鳥取駅の南東約2kmに位置し、市街地から国道29号線を南下して新袋川を渡るとすぐ東側にその西端部を見ることができる。今木山、畠山とともに因幡三山の一つに数えられるこの面影山からは大路山や空山といった鳥取平野南部一帯を、東は古代史の舞台である国府町の家並みを、さらに北に目を転じると稻葉山から市民のシンボルともいうべき久松山を一望のもとに見渡すことができる。

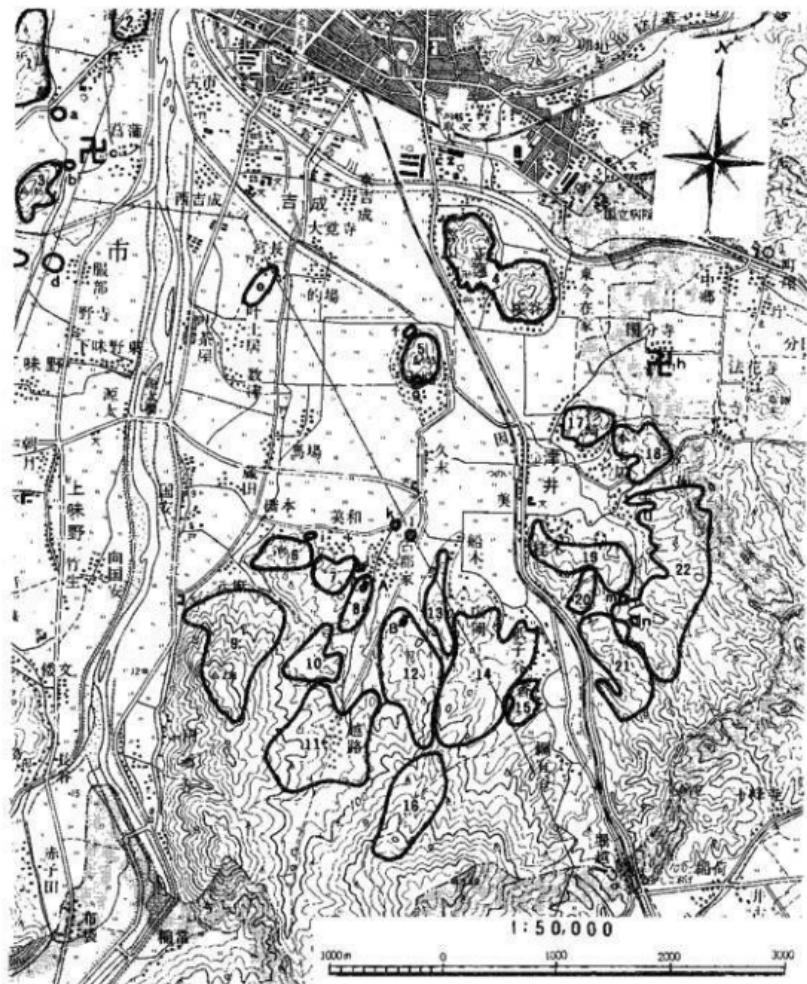
この地域はかつての法美郡面影村にあたり、のち明治29年から岩美郡に所属し、昭和28年に鳥取市の一部となり現在に至っている。以前は水耕に苦しんだこの地域も大路川や新袋川などの河川改修工事以降肥沃な水田地帯として開け、丘陵麓に沿って森山、正蓮寺、東今在家、大代など集落が営まれ静かな農村地帯を形成していたが、現在では宅地の造成が急ピッチで進み市内でも有数の新興住宅地となっている。

このように変貌を遂げつつある面影山丘陵周辺の平野は、地質的には沖積平野に特徴的な粘土質の堆積物によって形成され、水持ちが良く、初期の水稻耕作には適していたと考えられる。このことはこの地域が古代から生産基盤確保の好条件を備えていたことにはかならず、丘陵一帯の古墳群の造営はもとより、それ以前に遡る遺跡の形成に大きくかかわったであろうことは想像に難くない。

しかしながら本丘陵周辺には現在のところ先土器時代から縄文・弥生時代に遡る遺跡は知られておらず、最も近い縄文時代の遺跡としては唯一古郡家地内にトチ、アラカシといった堅果類の貯蔵穴が検出された晩期前半に属する大路川遺跡が知られるのみである。

弥生時代の遺跡についても本丘陵周辺の実態は明らかではないが、平野南部の丘陵地については近年調査事例が増加している。最も古い集落遺跡としては前期末～中期初頭の上器類が出土した西大路土居遺跡があり、つづいて中期～古墳時代まで断続して営まれた掘立柱建物跡が検出された久末・古郡家遺跡、後期後半～古墳時代に至る多数の竪穴住居跡が検出された生山大池遺跡が知られている。また墳墓遺跡としては、それぞれが複数の埋葬施設を持つ後期後半のいわゆる墳丘墓2基が紙子谷遺跡門上谷地区で調査されている。そのほか、越路の樹岡地内からは外縁鋸2式の流木文銅鐸が出土している。

古墳時代にはいると鳥取平野南部の丘陵地帯には大小様々な古墳が築造され、市内でも有数の古墳密集地帯を形成しており、それぞれのまとまりによって面影山、大路山、美和、古郡家、六部山、広岡、空山、紙子谷、生山、津ノ井といった古墳群に分けられている。その大半は小規模な方形墳や円墳によって形成されているが、この中には前・中期を代表する大型前方後円墳である古郡家1号墳(90m)、六部山3号墳(63m)が含まれ、これらの古墳は鳥取平野南部の首長墓と考えられ



- | | | | | |
|-----------|------------|------------|------------|---------------|
| 1. 古海古墳群 | 9. 八坂古墳群 | 17. 杉崎古墳群 | a. 山ヶ泉遺跡 | i. 装本遺跡 |
| 2. 鹿地古墳群 | 10. 園原古墳群 | 18. 津ノ井古墳群 | b. 菩薩遺跡 | j. 伊勢谷遺跡 |
| 3. 鮎山古墳群 | 11. 越路古墳群 | 19. 桂木古墳群 | c. 菩薩庵寺 | k. 久末・古都部遺跡 |
| 4. 商影山古墳群 | 12. 六郎山古墳群 | 20. 海成寺古墳群 | d. 腹部遺跡 | l. 大路川遺跡 |
| 5. 人跡山古墳群 | 13. 船木古墳群 | 21. 紙子谷古墳群 | e. 宮長竹ヶ鼻遺跡 | m. 生山大通跡松ヶ谷地区 |
| 6. 梅木古墳群 | 14. 広岡古墳群 | 22. 生山古墳群 | f. 西大路土居遺跡 | n. 紙子谷門上谷道路 |
| 7. 笑和古墳群 | 15. 香取古墳群 | A. 古部家1号墳 | g. 大路山遺跡 | |
| 8. 古部家古墳群 | 16. 空山古墳群 | B. 古部山3号墳 | h. 四幡同分寺跡 | |

第1図 猪取市南東部遺跡分布図

ている。またこの時期の小規模古墳は主として木棺、箱形石棺を埋葬施設とし、丘陵頂部や稜線上に比較的まとまりをもって築造されている。後期にはいると空山古墳群に見られるような横穴石室を内部主体とした群集墳が展開し、その中には鳥、木、葉、人物、三角文などの線刻壁画を伴う古墳も含まれており、一つの特徴となっている。近年調査された広岡古墳群からは多数の副葬品とともに金銅装生頭大刀や刀装部に銀象嵌を施した大刀が出土し、当刻地後期古墳の実態解明の重要な資料となっている。

なお古墳時代の集落遺跡の調査事例は少なく、知られるものも弥生時代から継続して営まれた古墳前期の遺跡がほとんどで、中期の堅穴住居跡1棟を検出した生山大池遺跡や同3棟を検出した広岡西矢谷遺跡のほか、中期・後期の遺跡はこれまでのところ知られておらず実態は不明のままである。その他には古墳時代に関連する遺跡として古式須恵器が採取された越路の須恵器窯跡群があげられる。

歴史時代にはいると面影山丘陵東側の平野部には因幡国守、因幡国分寺が近接して設けられ、これらの遺跡の調査からは当刻の遺構とともに若干の中世遺構や遺物が検出されている。

以上のように面影山周辺の平野部は早くから中央との結び付きを深めるとともに鳥取平野の政治的文化的中枢として発展し消長していった地域であるといえよう。

III 面影山古墳群

1. 古墳の分布

面影山古墳群が立地する面影山は、その軸が北東に湾曲しながら北西～南東方向に延びる尾根主稜線と、それから延びる多くの支稜線によって形成される起伏に富んだ丘陵地である。この丘陵地は、標高約60mを頂点とした北西側丘陵、標高約110mを頂点とした南東側丘陵、標高約40mの両者の鞍部に大きく三分でき、それぞれに約8～20m前後の小・中規模を主体とした方形墳、円墳が築造され、南東側丘陵上には大規模な前方後円墳も築造されている。これらの古墳のほとんどは各尾根の稜線上に連続的に築造されており、いくつかの支群を形成している。その疎密の状態を見ると、現時点では特に丘陵中央部と東側丘陵に比較的古墳が密集し、北西側丘陵は相対的に数が減じている。ただし未踏査の尾根も依然存在し、今後のより詳細な分布調査が必要であろう。

なお本古墳群は、1973年に鳥取県教育委員会によって発刊された『改訂鳥取県遺跡地図－第1分冊－』には73基の古墳が記載されていたが、現在ではその後の発掘調査や部分的な踏査等により95基を数えるに至っている。この内、北西側丘陵部には全長26mを測る小型の前方後円墳（11号墳）が含まれ、また南東側丘陵部には前述の全長54mを測る前方後円墳（73号墳）が含まれている。

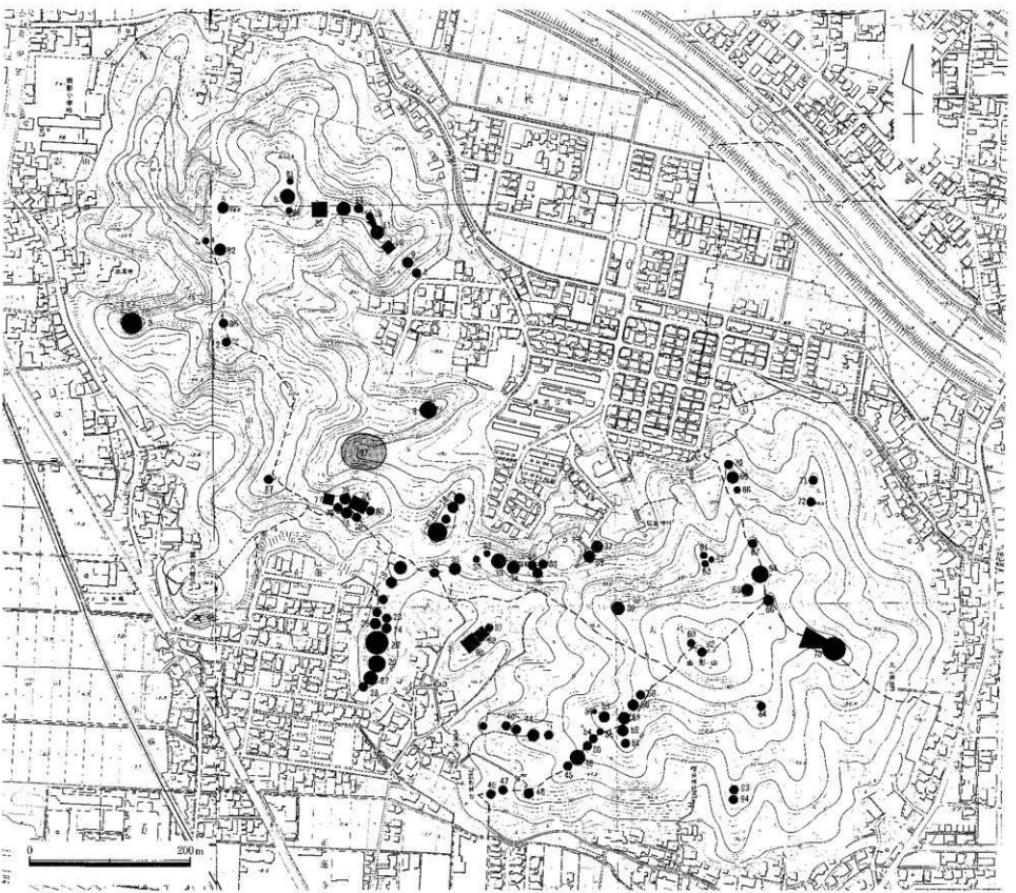


表1 面影地区遺跡分布図対照表 (1)

No.	古墳名 遺跡名	形 状	規 格 直径×高さ 延×延×高	周 辺施設・遺物	出 土 遺 物	番 号	備 考
1	面影山1号墳	円 墳			須恵器	244	西城(昭和10年代)
2	* 2号墳	円 墳	?			245	通称「立石」
3	* 3号墳	円 墳	24×3			246	
4	* 4号墳	円 墳	7×0.9			247	
5	* 5号墳	円 墳	12×1.5			248	
6	* 6号墳	円 墳	17×1.9			249	
7	* 7号墳	円 墳	16×2.4	木棺直葬、周溝	墳丘(須恵器基盤、漆器片、土師器等)、土体部 (須恵器、漆器、土師器等)、土体部 (須恵器、漆器、土師器等)	250	1985年発掘調査
8	* 8号墳	円 墳	20×2			251	消滅(1983年)
9	* 9号墳	円 墳	13×0.5			252	消滅(昭和50年代)
10	* 10号墳	方形状?	12×~×~	周溝	須恵器(須恵器子持窓、器口片)	253	1985年発掘調査、墳丘の一部遺存
11	* 11号墳	前方後円墳 全長26m	16×2.3	木棺直葬、周溝	七体部(須恵器基盤、漆器、土師器等)、土体部 (須恵器等)、後円部(須恵器等)、土体部 (須恵器等)	254	1985年発掘調査
12	* 12号墳	—	—			255	1985年発掘調査、11号墳の前方部
13	* 13号墳	円 墳	8.6×1.1	木棺直葬?、周溝	須恵器(須恵器子持窓、器口片、器底不 明)、漆器片	256	1985年発掘調査
14	* 14号墳	円 墳	8.3×0.25	周溝	漆器不明の須恵器片	257	1985年発掘調査、土体部不明
15	* 15号墳	円 墳	23×2			258	消滅(1983年)
16	* 16号墳	円 墳	10×0.5			259	消滅(1983年)
17	* 17号墳	円 墳	12×0.3			260	消滅(1983年)
18	* 18号墳	円 墳	12×1			261	消滅(1983年)
19	* 19号墳	円 墳	15×1.8			262	
20	* 20号墳	円 墳	13×1.5			263	
21	* 21号墳	円 墳	10×1			264	
22	* 22号墳	円 墳	10×0.9			265	所在を確認できず
23	* 23号墳	円 墳	10×0.5			266	
24	* 24号墳	円 墳	11×0.5			267	
25	* 25号墳	円 墳	12×0.5			268	所在を確認できず
26	* 26号墳	円 墳	28×2.1			269	
27	* 27号墳	円 墳	16×1.3			270	
28	* 28号墳	円 墳	—	横穴式石室		271	所在を確認できず
29	* 29号墳	円 墳	20×2			272	
30	* 30号墳	円 墳	10.4×0.4			273	消滅(1983年)
31	* 31号墳	円 墳	14×2			274	消滅(1983年)
32	* 32号墳	円 墳	8×1			275	
33	* 33号墳	円 墳	17×2			276	
34	* 34号墳	円 墳	19×1.7			277	
35	* 35号墳	円 墳	10×0.5			278	
36	* 36号墳	円 墳	11×2			279	
37	* 37号墳	円 墳	14×0.8			280	
38	* 38号墳	円 墳	14×1.7			281	
39	* 39号墳	円 墳	15×1.2			282	
40	* 40号墳	円 墳	8.5×0.5			283	半球
41	* 41号墳	円 墳	?			284	浜の分布図付照表には「斜土解平、 石室材(?)」とあるが、所在を確認 できず
42	* 42号墳	円 墳	10×0.9			285	
43	* 43号墳	円 墳	14×1.2			286	
44	* 44号墳	円 墳	10×0.5			287	
45	* 45号墳	円 墳	11×1			288	
46	* 46号墳	円 墳	10×1			289	
47	* 47号墳	円 墳	10×1			290	
48	* 48号墳	円 墳	11.5×1			291	
49	* 49号墳	円 墳	17×1.5	横穴式石室?		292	石室破壊

表1 面影地区遺跡分布図対照表 (2)

No.	古墳名 遺跡名	種類	面積 丈径×高さ 延×延×高	埋葬施設・墓構	出土遺物	番号	備考
50	50号墳	円 墓	11×1			293	
51	51号墳	円 墓	11×1.5			294	
52	52号墳	円 墓	12×0.7			295	
53	53号墳	円 墓	12×0.9			296	
54	54号墳	円 墓	10×0.6			297	
55	55号墳	円 墓	8×1			298	
56	56号墳	円 墓	8×0.4			299	
57	57号墳	円 墓	14×1.5			300	
58	58号墳	円 墓	12×1			301	
59	59号墳	円 墓	10×1.3			302	
60	60号墳	円 墓	8.5×0.3			303	
61	61号墳	円 墓	8×0.5			304	
62	62号墳	円 墓	6×0.3			305	
63	63号墳	円 墓	7×0.3			306	所在を確認できず 石束材(?)遺存、石室破壊
64	64号墳	円 墓	20×2.4	横穴式石室		307	
65	65号墳	円 墓	14×1			308	
66	66号墳	円 墓	12×1.5			309	
67	67号墳	円 墓	10×0.3			310	
68	68号墳	円 墓	8×0.3			311	
69	69号墳	円 墓	14×1			312	
70	70号墳	円 墓	9×0.3			313	
71	71号墳	円 墓	9×0.4			314	
72	72号墳	円 墓	9×0.4			315	
73	73号墳	前方後円墳	全長54			316	前方部長27、幅17、高1.5、後円部28×4
74	74号墳	方 形 墓	20×16×2	木棺墓葬、同調 主体部(内行花文鏡、ヒスイ製鏡七、 玻璃玉質玉、木棺材、木)	埴丘・圓溝(立、高秆) 主体部(内行花文鏡、ヒスイ製鏡七、 玻璃玉質玉、木棺材、木)		1986年発掘調査
75	75号墳	円 墓	13×2	木棺墓葬、同調	埴丘・圓溝(立、高秆) 主体部(小)		1986年発掘調査
76	76号墳	円 墓	11×0.3	木棺墓葬、同調	埴丘・圓溝(立、高秆) 主体部(高秆、铁劍、錐、铁鏡他)		1986年発掘調査
77	77号墳	方 形 墓	12×12×1	木棺墓葬、横穴式石室、 同調	埴丘・圓溝(立、高秆) 主体部(高秆、リヤ)		1986年発掘調査
78	78号墳	円 墓	?	12倍径	同調の一部のみ遺存 埴丘・圓溝(立、高秆片付)		1986年発掘調査
79	79号墳	円 墓	-	-	埴丘・圓溝(立、高秆片付)		高城(1985年)
80	80号墳	-	-	同調のごく一部のみ遺存	須恵器		高城(1985年)
81	81号墳	円 墓	7.3×0.5				
82	82号墳	円 墓	12×0.5				
83	83号墳	円 墓	8×1				
84	84号墳	円 墓	9.5×1				
85	85号墳	方 形 墓	18×11.5				
86	86号墳	円 墓	7.5×0.5				
87	87号墳	円 墓	10×0.5				
88	88号墳	円 墓	?	-			
89	89号墳	方 形 墓	14×12.5×1.3	土塚、溝	同調(?)骨器類片)		1990年発掘調査
90	90号墳	方 形 墓	17.8×11.4	木棺墓葬、溝	埴丘・圓溝(土築基盤) 主体部(鉢形器台、高秆、勾玉、铁製品)		1990年発掘調査 前方後方墳の後方部の可能性あり
91	91号墳	円 墓	?	8×0.5			
92	92号墳	円 墓	?	-			埴丘の可能性もあり?
93	93号墳	円 墓	?	-			
94	94号墳	円 墓	?	-			
95	95号墳	円 墓	?	-			
96	-	-	-	-	円筒埴輪片		古墳所在の可能性あり
97	大穴庭園道路	梵鐘絶滅跡	-	-			「面影史」-第11号、第13号-

注: 表中の「地名」は、鳥取県教育委員会(改訂)「鳥取県遺跡地図 第1分冊」(1973年)による。

2. これまでの調査研究

鳥取市内でも有数の新興住宅地となった面影山丘陵周辺の古墳の公的な記録は、大正13年に鳥取県が発刊した『鳥取懸史蹟勝地調査報告 第二冊』「因伯二國に於ける古墳の調査」に認められる。ここには小円墳群と横穴式石室をもつ古墳、明治年間に破壊され消滅した古墳のことが記載されている。その後注目されることもなかったが、昭和40年代に入ってから宅地造成によって面影山11号墳の位置する丘陵東側が切削され、未調査のまま数基の古墳が破壊された。この時破壊された古墳に伴うものと考えられる須恵器が採集されている。現在県立博物館と面影小学校に収蔵されている。採集された須恵器は、短脚の有蓋高杯1組、高杯、竈各1点でおおむね6世紀前半代の所産になるものである。この後1983年（昭和58）、1985年（昭和61）にも宅地造成等によって7基の古墳が消滅している。

簡単な記録しかなかったこの地域において、本格的な発掘調査がなされるのは宅地開発にともなう1985年（昭和60）の発掘調査（7・10・11・13・14号墳）以降のことである。翌1986年（昭和61）にも発掘調査（74・75・76・77・78号墳）が行なわれている。

この両年における発掘調査について見てみると、現在知られる本古墳群の90余基の古墳のうち計10基の古墳（7・10・11・13・14・74・75・76・77・78号墳）が対象となっている。これらは木棺直葬を主たる埋葬施設とする中期から後期初頭の古墳で、その墳形は前方後円墳、方形墳、円墳とバラエティーに富んでいる。このうち前方後円墳である面影山11号墳は、当初県の分布図では11号墳と12号墳の2基に分けて記載されていたが、調査によって全長26mを測る小型前方後円墳であることが確認されたものである。他の小型古墳と同一の尾根上に混在し、かつまた小型古墳と大きな格差が認められない埋葬施設をもつというこの古墳のありかたは、本古墳群における墳丘型式の多様化を考える上で重要な示唆を与えるものと考えられる。

調査された方形墳のうち比較的造存状態の良好であった74号墳からは4基の埋葬施設が検出され、木棺直葬である第1主体部からは木棺材の一部とともに赤色顔料、内行花文鏡1面、ヒスイ勾玉1点、ヒスイ棗玉2点、碧玉管玉30点が出土している。このうち銅鏡は『長生宣子鏡』をもつと考えられる船載鏡で人為的に破碎された状態で検出されており、一つの特徴となっている。

調査された円墳のうち墳丘のかなりの部分が流失した状態で検出された75号墳の埋葬施設からは、約1500個にも及ぶガラス小玉が出土している。また近年出土事例が増加中の山陰地方特有とみられる土師器転用枕が76号墳の埋葬施設内から出土している。

以上これまでの調査研究史とその内容の一部を簡単に述べたが、本古墳群についての調査はまだ着手されたばかりであり、その全容の解明は今後の調査研究に期待するところである。

参考文献 鳥取県『鳥取懸史蹟勝地調査報告 第二冊』（1924年）

面影郷土史研究会『面影郷土史』（1980～1983年）

鳥取市教育委員会『面影山古墳群・古岡遺跡発掘調査概要報告書』（1987年）

IV 発掘調査の概要

今回の発掘調査は、面影山古墳群を形成する支群の中の他からやや独立した3基の古墳によって形成される小支群のうちの89、90号墳を対象として実施した。2基の古墳は、面影山丘陵の一級低くなつた中央部から南北に延びる標高30m程度の小尾根上に隣接して築造されている。ほぼ同時期に造営されたと考えられる両古墳は、いずれも方形墳と考えられるが、90号墳については調査範囲の制約を受け詳細を明確にすることができなかつた。ただ、その地形状況などから前方後方墳になる可能性もあることを付記しておきたい。

両古墳とも墳丘のかなりの部分が流失しており、89号墳では明確な埋葬施設は検出できなかつたものの、4基の土壙（上坑）を検出した。また90号墳では埋葬施設1基を検出した。

出土遺物の量は極めて少なく、90号墳埋葬施設内出土の遺物のはかは表土や周溝内からわずかの土器片が出土したに留まっている。

1. 面影山89号墳

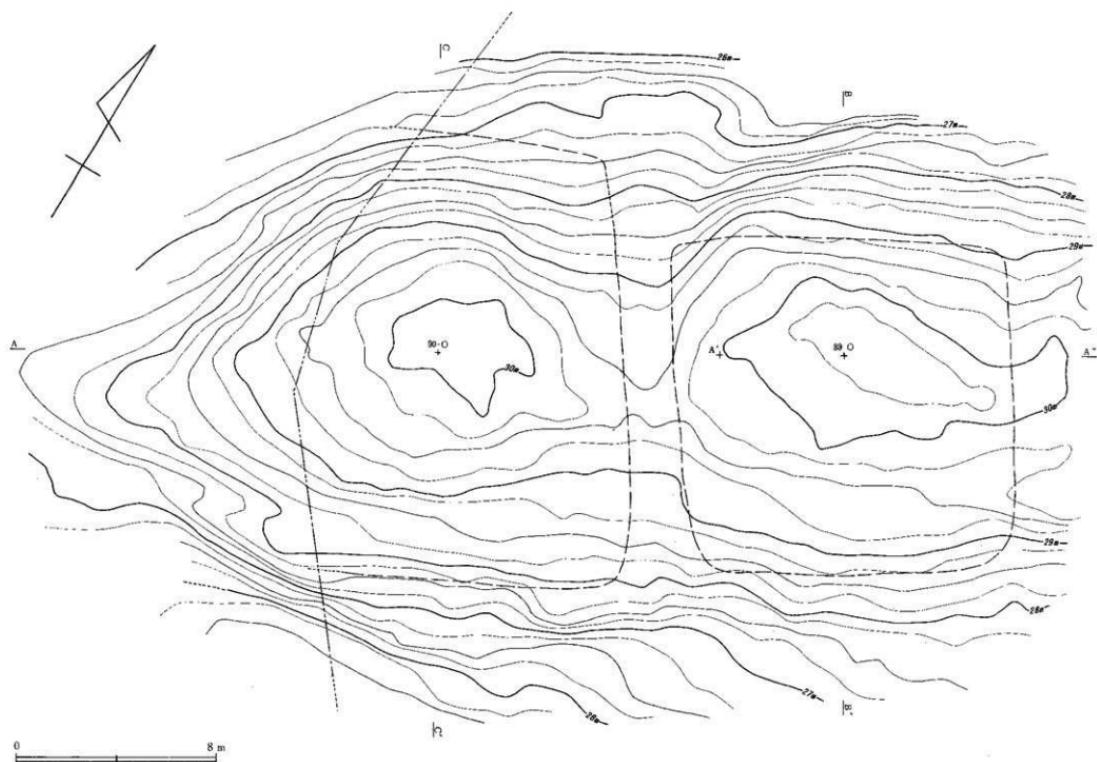
89号墳は、調査古墳の存在する標高30.25m程度（現状では墳丘最高所は標高30.45mを測る）の小尾根の平坦部を利用して、溝の掘り下げと地山整形、盛土によって築造されたものと思われる。

溝は、墳丘の東側および西側で検出された断面刊弧状を呈するもので、尾根を一直線状に南北に横断する。その溝上を観察すると、尾根の低い方側に位置する西側溝では盛土の流土と思われる黄褐色粘質上層のみが認められ、墳丘築造後まもない時期に埋没したことがうかがわれる。また東側溝では最低部に盛土の流土と思われる暗黄褐色粘質上層が堆積し、その上層に淡黒褐色粘質土が堆積している。このことはこちらの溝は墳丘築造後まもない時期に若干埋没したもの、その後溝としての形状を残す安定した時期があったことを示していると思われる。なお西側溝は、墳丘遺存部では墳裾コーナー付近から北側に湾曲するように見えるが、これは後世の山道等によるものと考えられる。

地山整形は墳丘の北側と南側墳裾部で行なわれたものと考えられる。それぞれ尾根に並行して地山をカットしてテラス部を成形すること（地山加工）で墳丘を削り出している。ただし地山加工痕跡は土砂流失等によって現在では南側にその一部が認められるのみである。

盛土は本墳築造に伴う溝の掘り下げや地山加工時に生じた土砂等を利用して行なわれたものと考えられる。ただし本墳が小尾根上に築造されたため長い間にそのほとんどが流失し、現在では墳丘の北東側のごく一部にわずか遺存するに留まっている。

本墳の形状は、溝と地山加工痕跡とが隅丸ながらほぼ直交していることから方形と考えられる。墳丘の規模は東西約14m（溝底間）、南北約13.5m（墳裾間）で、高さは西側溝底から1.3m、南側墳裾から1.7mを測る。また現在遺存する墳頂部の形態は、東西に細長い長方形で南側に若干傾斜し、東西約5.5m、南北約12.5mを測る。なお、南側墳丘斜面の一部が、山道によって東西にカットさ



第3図 面影山89、90号峰地形実測図

れている。

埋葬施設は墳丘盛土のほとんどが流失していたためその検出はできなかったが、墳丘中央からその北東側にかけて土壙（土坑）計4基を検出した。以下、土壙（土坑）について述べるが、その際、埋葬施設の可能性の高いものを土壙、他のものを土坑と区別して表記した。

土壙1は長軸をN-40°-Eにとって墳頂部の中央に垂直に近い角度で掘り込まれている。規模は長さ200cm強、幅100cm強、深さ35cmを測り、当初は本墳の埋葬施設の可能性も考えたが、遺物の出土もなく平面形態、床面の形状等も不整形のため決め手に欠き、本墳築造以降の土壙と考えるに至った。

土壙2は土壙1の東側約1.4mに土壙1とほぼ直交する形で長軸をN-44°-Wにとって垂直に近い角度で掘りこまれている。規模は長さ150cm強、幅80cm強、深さ30cmを測るが、これも土壙1と同様に本墳の埋葬施設と考える積極的な決め手に欠き、墳丘の流失状況などとも考えあわせると本墳築造以降の土壙と考えられる。

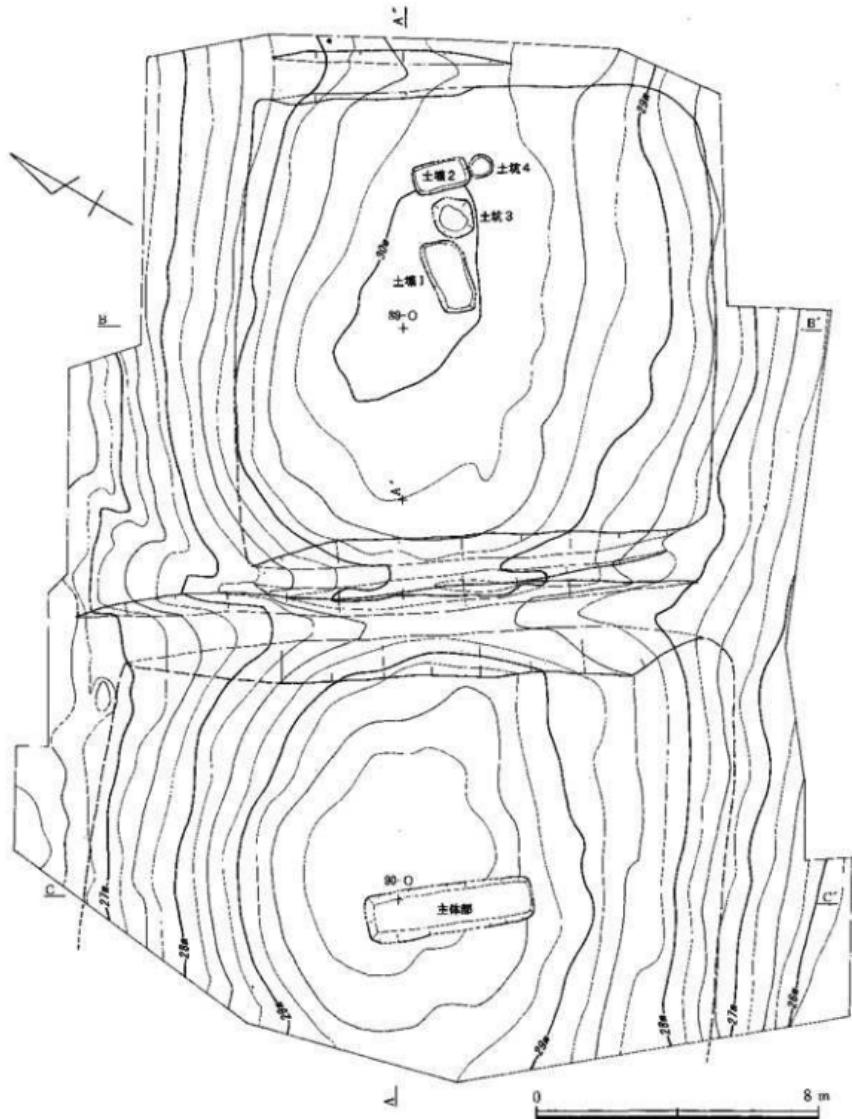
土壙3は土壙1と土壙2の間に位置し、平面は不整形な円形で床面も不整形となっている。規模は径約110cm、最深部の深さ約45cmを測る。前述の土壙1、2と同様に本墳以降の土坑と考えられる。

土壙4は土壙2の南側に隣接して掘り込まれ、橢円形を呈している。かなりの部分が流失しており、現在遺存する規模は径約64cm、深さ約18cmを測る。前述の土壙（土坑）と同様に本墳以降の土坑と考えられる。

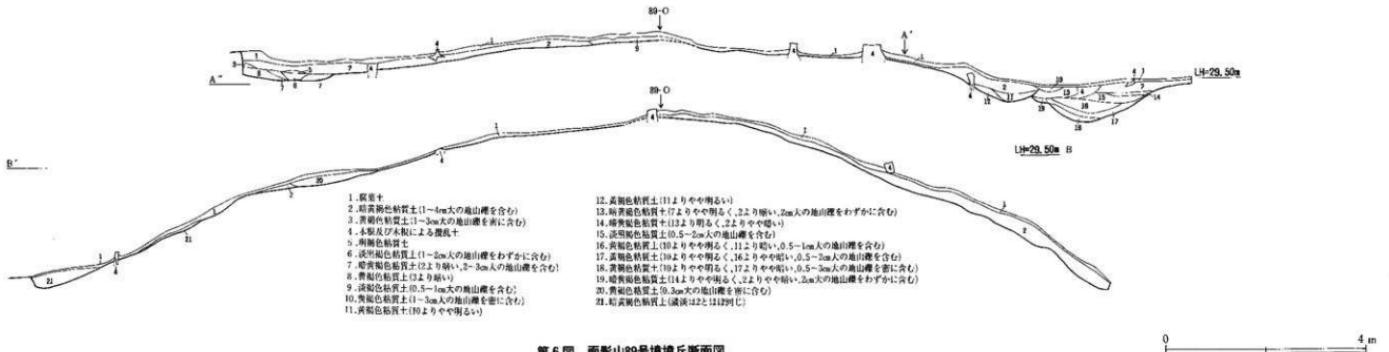
遺物は極めて少なく、北側墳堀及び東側周溝底から土師器細片がわずかに出土するに留まっている。



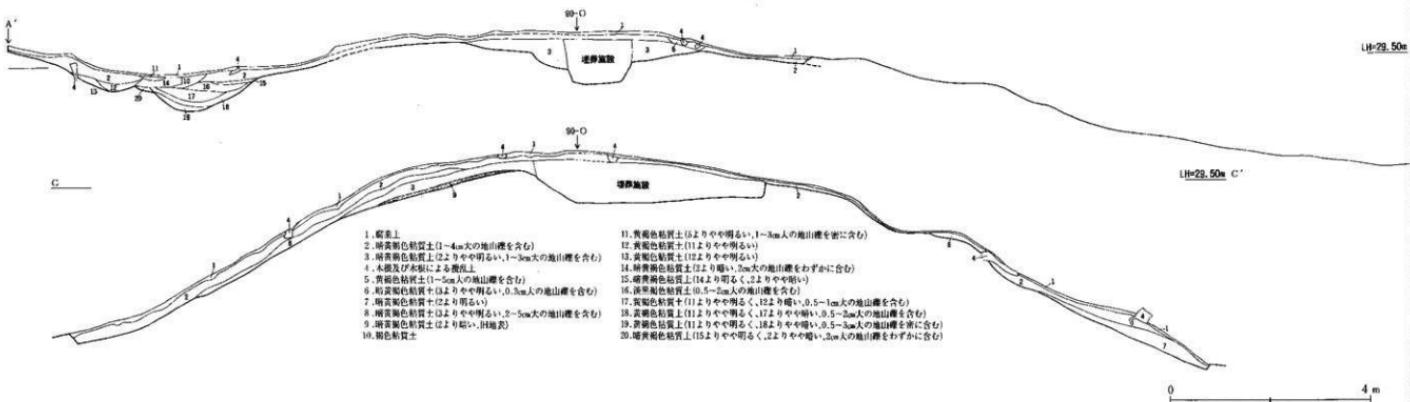
第4図 面影山89号墳土壙（土坑）実測図



第5図 面影山89、90号墳墳丘遺存図



第6図 面影山89m墳墳丘断面図



第7図 面影山90m墳墳丘断面図

る。なお東側周溝付近から須恵器片1点の出土が認められたが、その出土状況などからこれは本墳の東側に隣接する91号墳に伴うもの、あるいは何らかの理由で本墳には無関係のものが混入した可能性が高いものと考えられる。

本墳からはその築造時期を明確に示すような遺物は検出されなかった。

2. 面影山90号墳

90号墳は、89号墳の西側に隣接し、80号墳より若干下った標高30m程度（現状では墳丘最高所は標高30.15mを測る）の尾根の平坦部を利用して溝と地山加工、盛土によって築造されている。

溝は墳丘の東側で検出された掘り割り状のもので、断面はやや丸みを帯びた逆台形状を呈し、尾根を一直線状に南北に掘り込んでいる。その断面の埋土を観察すると、溝のほとんどを埋める形で盛土の流失と思われる三層の黄褐色粘質土層が堆積し、その上層に淡黒褐色粘質土層が認められる。これはこの溝が墳丘築造後まもない時期には埋没し、溝としての機能をほとんど果たすことがなかったことを示していると思われる。なお本墳の西側墳裾にも同様の溝の存在が推測されるが、調査範囲外にあたり未確認となっている。

地山整形は89号墳と同様に北側および南側墳裾で認められる。それぞれ尾根に並行して地山加工を行ない、墳丘を削り出している。このうち北側の地山加工痕跡は頗るに遺存していたものの、南側のものは地山の流失が著しく、一部がわずかに検出されたに留まっている。

盛土も89号墳と同様に溝の掘り下げや地山加工の際に生じた上砂等を利用して行なったものと考えられる。本墳についても盛土の流失は著しく、墳丘北側地山直上の旧地表の上に二層が検出されたに留まっている。

本墳の形態は、調査範囲内での推定では、直線上の溝と尾根にはほぼ並行する地山加工痕跡とがほぼ直交することから方形墳と考えられる。しかしながら本墳を方形墳とした場合の西側の推定墳裾部周辺（調査範囲外）には東側に遺存する溝のような明確な落ちこみが認められなかった。また東西に延びる北側墳裾部が南西側にくびれた後再び西側に延びていく現状を見ると、本古墳が調査地の西側に前方部を持つ前方後方墳の可能性もあることを指摘しておきたい。なお、南側墳丘斜面の一部が、山道によって東西にカットされている。

墳丘の規模は南北約17.85m（墳裾間）で、高さは東側溝底から1.4m、北側墳裾から約3.3mを測る。また、現在遺存する墳頂部の形態は、北東側が流失してしまった東西に長い推定長方形で、東西が南側に若干傾斜している。東西で約11m、南北約9mを測る。

埋葬施設は、墳頂部中央よりやや南西側から1基検出した。隅丸長方形で長軸を東側掘り割り状溝とほぼ平行のN-40°-Wにとてはほぼ垂直に近い角度で掘りこまれている。墓壙の規模は、長さ460cm、幅140cm、最大遺存高85cmを測る。墓壙内埋土断面の観察から、この中に長さ360cm、幅50cm程度の木棺が直葬されていたものと考えられ、この木棺の範囲内から出土した遺物の位置から考えて、頭位は南東側と思われる。なお、この墓壙南端部の東側約1.5m付近の地山直上から十輪器器

台の一部が出土しているが、墓壙などの遺構は検出されなかった。ただ埋葬施設との位置関係や墳頂部の地山の傾斜、盛土の流失状況などからこの位置にも埋葬施設か埋葬儀礼に伴うなんらかの遺構があった若干の可能性は考えられよう。

遺物は89号墳と同様に少ないが、埋葬施設内と北側墳裾、東側周溝埋土内、南側墳頂部からそれぞれ出土している。埋葬施設内出土の遺物は墓壙埋土中のものと床面直上のものがあるが、埋土中のものは墓壙の北側および南側の二か所で、ともに暗黄褐色粘質土層である第2層と第3層の境界付近から出土した。これらはその出土位置などから木棺埋納時に混入、あるいは故意に埋置されたものの可能性が考えられる。さらに北側のものはあとで述べる高杯の脚部の一部、また南側のものは器台の一部とも推定されるが、ともに風化し脆弱になった細片で後述の土師器と同一個体であるか明確な判断は不可能であった。

床面直上のものは前述のとおりいずれも木棺内の遺物と考えられ、土師器高杯1点、鼓形器台1点、勾玉1点、鉄製品2点、若干の朱が検出された。

高杯は木棺の中央付近から脚部を打ち欠き杯部を上にした状態で検出されたが、土圧によってつぶれていくつかの破片となって開き、風化が進んでぼろぼろの状態であった。大きさは、杯部復元口径部径約15.0cm、1/3残存する杯部の残存高は約5.0cmを測る。外面に段ではなく、赤彩、暗紋は現状では認められない。

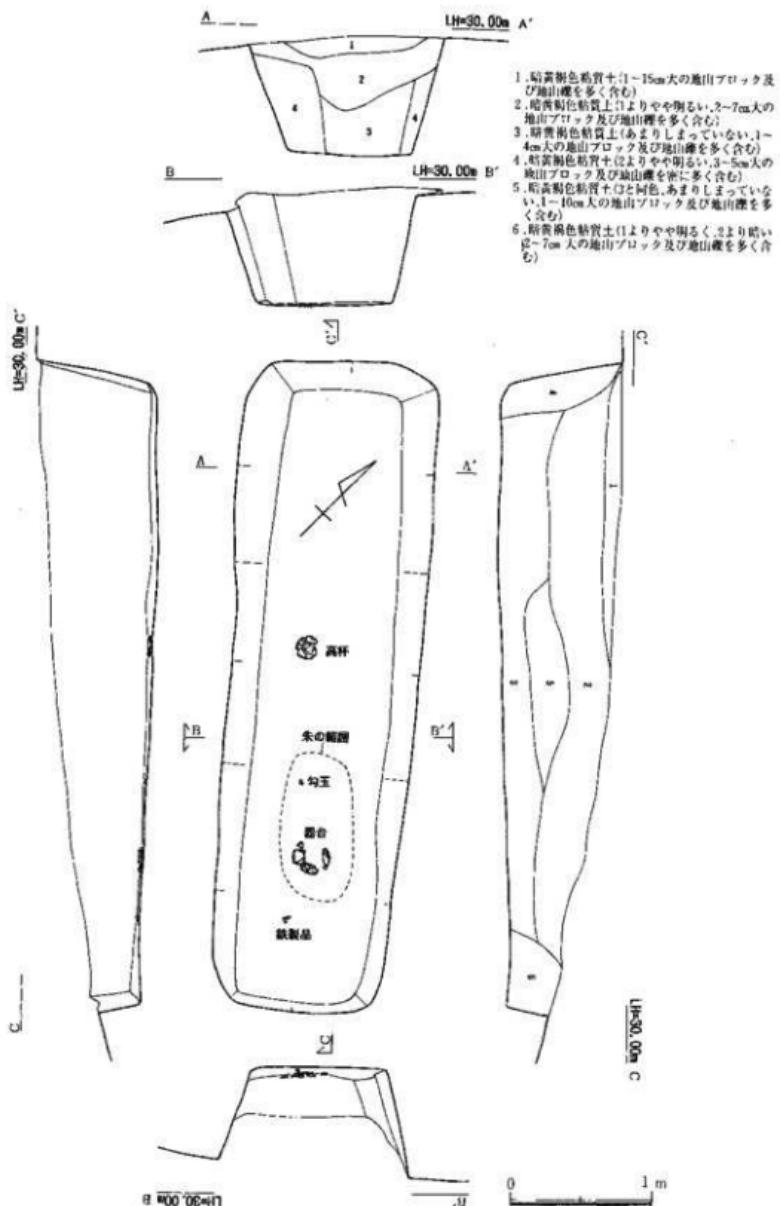
鼓形器台は木棺の南西側から検出された。受部を上にして検出されたが、完全につぶれて風化が進みぼろぼろの状態であったうえ、調査中のサブトレンチ掘り下げ中に同個体の一部が取り上げられてしまったこともあって口径、底径、器高とも不明であるが、受部と脚台部の接合部につまみだしの稜を持つ。赤彩は現状では認められなかつたが、朱の付着が認められた。

勾玉は器台の北約40cmから頭を器台側に、背を西側に向いた状態で若干北側に傾斜して出土した。頭部に三条の溝を刻んだいわゆる丁字頭で、C字状を呈している。通し穴は両面から穿孔されており、頭部の溝を刻む際の脱線痕跡も認められる。全長3.0cm、幅1.05cm、最大厚1.0cm、重量8.1gを測る。ひすい型である。

鉄製品は、木棺の最南端部から2点隣あう形で出土した。大きい方の鉄製品は、遺存長5.6cm、最大幅0.83cm、最大厚0.35cm、重量1.9gを測り、断面形は片刃状になっている。また他方は遺存長1.2cm、最大幅0.7cm、最大厚0.26cm、重量0.3gを測り、断面形はこちらも片刃状になっている。これらはおそらく同一固体と思われるが接合部分は見出せなかつた。

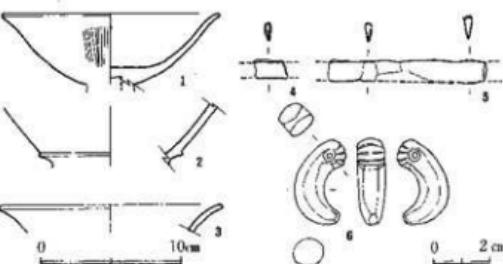
朱は器台出土位置から勾玉出土位置にかけて点々と検出され、器台出土土地周辺の密度が高くなっている。

東側周溝内出土の遺物は、埋土の中位にあたる淡黒褐色粘質土層の下層である黄褐色粘質土層中から検出された。土師器の破片で遺存状態が悪く、器種等は不明である。なおその出土位置から周溝の埋没が完了して安定する直前の板落等による混入と考えられる。



第8図 面影山90号墳埋葬施設実測図

南側墳頂部の遺物は、前述のとおり表土下の地山直上で検出された。遺存状態は極めて悪く、口縁部の一部しか検出されなかつたが、器台と考えられる。墳頂部中央付近からの転落遺物とも考えられるが、その出土位置などからここにもう一つ埋葬施設があり、その中の遺物であった可能性も認めたい。



第9図 面影山90号墳出土遺物

最後に本墳の築造時期であるが、出土遺物の編年観などから古墳時代前期後半頃と考えられる。またわずかに認められる89号墳との切り合い関係から90号墳が89号墳に先行して築造されたものと思われる。

V おわりに

今回の発掘調査は、面影山丘陵中央部の主稜線から南西に延びる支稜線上にまとまって造営された3基の古墳のうちの面影山89号墳、90号墳の2基の古墳が対象となった。以下、いくつかのポイントを述べることで今回の発掘調査のまとめとしたい。

古墳の位置 2基の古墳は、面影山古墳群を形成する支群のうち他からやや独立した小支群に属し、支稜線上に立地する。2基とも標高30m程度の尾根の平坦面を利用して隣接した状態で築造されている。北東側から南東側に向けて89号墳、90号墳の順で、調査前はさしたる利用もなされず雑木林であった。

墳丘 墳丘の遺存状態はあまり良好とは言えず調査前にも若干の高まりがあるにすぎなかつたが、溝や地山加工段等から推定される規模は、89号墳が一辺14m前後、90号墳が一辺18m前後となった。本来の墳丘高は不明であるが、遺存高（溝底からの高さで、1.3~1.7m）や周辺の流土量から推定してあと数十cm以上の盛土がなされていたものと考えられ、90号墳からは盛土の一部が顕著に検出された。墳丘の構成は地山加工と盛土のほか、89号墳では墳丘の東および西側に、90号墳では東側にそれぞれ尾根を一直線状に横断する溝あるいは掘り割り状の溝を掘り込んでいる。

なお、本報告書では90号墳は方形墳として取り扱っているが、調査範囲外の地形を見るかぎりでは前方後方墳となる可能性もあることは前述のとおりである。

埋葬施設 埋葬施設は、両古墳とも墳丘の流失が著しく89号墳からは検出できず、90号墳から1基のみ検出したに留まつた。90号墳の埋葬施設は墳頂部中央よりやや南西部に位置し、北西~南東方向に主軸を取り南東側に頭位を置く。全長460cm、幅140cmを測る墓塙の規模は木棺直葬のものとし

ては比較的大きく、主にこの墓壙内想定木棺の中から本墳築造時期の判断材料となる遺物が出土した。

出土遺物 調査対象の両古墳からの出土遺物の量は少なく、遺存状態も良好とは言いがたいが、90号墳主体部内出土の遺物について若干触れておきたい。

高杯は脚部が打ち欠かれた状態で出土したが、主体部内の推定される木棺の中からはこれに接合する脚部は検出されなかった。このことはこの高杯が遺体の埋葬に際してすでに打ち欠いた状態で供せられたものと考えられる。ただ同主体部の埋土中からは土師器の細片が出土しており、主体部内出土の土器の一部が土体部内埋土中や墳丘上から検出される例のあることを考えると、これがこの高杯の脚部の一部である可能性があることは前述のとおりである。

鼓形器台はその出土位置などから土師器転用枕と考えられる。遺存状態の悪さなどから打ち欠きがあったかどうかは不明であるが、ただ同固体の破片の量と遺存状況から考えると主体部中央に面する部分に打ち欠きがあった可能性は高いと思われる。また仮に打ち欠きがあつとすると、土体部内埋土中の本器台に近い位置から出土した土師器細片がその一部である可能性もあることは高杯の場合と同様である。

勾玉は、その石材、産地等について山名巖氏に鑑定を依頼したところ、「調査地周辺では原しない濁りの少ない良質のひすいである」とのご教示をいただいた。

主体部内から検出された赤色顔料は、未鑑定であるが、色調などから水銀朱であろうと思われる。この朱は、墓壙内における偏った検出のされかたやその量から、埋葬遺体の上半身にふりかけるように使用されたものと考えられる。

築造時期 上記のとおり2基の古墳とも出土遺物が少ないうえその遺存状態も極めて悪く、築造時期を推定する資料に乏しいとはいえるが、90号墳主体部内から出土した鼓形器台から古墳時代前期後半の築造と考えたい。他の遺物も古墳時代前期的な様相を呈しており、大きな齟齬はないであろう。また89号墳についても、墳形や90号墳との関係等からやはり同時期の築造と考えられる。2基の古墳相互の関係性についてはわずかにみられる切り合い関係から90号墳が89号墳に先行して築造され、ほぼ継続して89号墳も築造されたものと考えられる。

土壙（土坑） 今回の発掘調査地内からは前述のとおり、89号墳頂部において4基の土壙（土坑）が検出された。当初これらのうちの2基については古墳の埋葬施設である可能性も考えたが、遺物もなくまた平面、断面の形態も不整形なことなどから古墳には伴わないそれ以降のものであると判断した。

以上のことから今回発掘調査を実施した2基の古墳は、面影山古墳群を形成する古墳の中でも、比較的古い時期のものであると思われる。

第3表 面影山 89、90号墳 調査一覧

名称	形状 (m)	墳丘 主部 遺構	埋葬方法	棺 長さ×幅×高さ	副葬品 長さ×幅×高さ	墓床・土坑等 平面形態	遺物		備考
							棺内	棺外	
89 号	方形墳 東周溝底～西周溝底 約13.48	車輪軸～軸轆 土塚1 13.31	主部 ナシ			隅丸方形 2.06×1.08×0.30	鉄器片 (表土中)	表土中出土の須恵器片 は引手塊の遺物の可能 性あり。	
		土塚2 14.12				隅丸方形 1.55×0.82×0.35	土師器片 (埴立)	主体部は流失したもの と考えられる。	
		土塚3 1.30				不整形 (往) 約1.10×約0.45	土師器片 (周溝底)		
		土塚4 0.75				楕円形 (往) 約0.64×約0.18			
		北周溝底からの高さ 1.44							
		南周溝底からの高さ 1.70							
90 号	方形墳 東周溝底～西周溝底 約17.85	車輪軸 土塚1 1.40	第1主部 木棺直葬	3.60×0.50×—	隅丸形 4.60×1.40×0.85	鏡形器台 丁字彫勾玉 (ヒスイ製) 鉄製品 盃形 朱(水銀?)	土師器片 器台?	棺内に七の鼓形器台は 土器軸用杖。 岡出土の高杯は脚部打 ち欠き。	
		北周溝底からの高さ 約3.30							
		南周溝底からの高さ 約2.70							

図版 1



1 調査地遠景（北から）



2 同 近景（北から）

図版2



1 調査地全景調査前（北から）



2 同 表土除去後（北から）

図版 3



1 面影山89号墳調査前（南西から）



2 同 表土除去後（南西から）

図版4

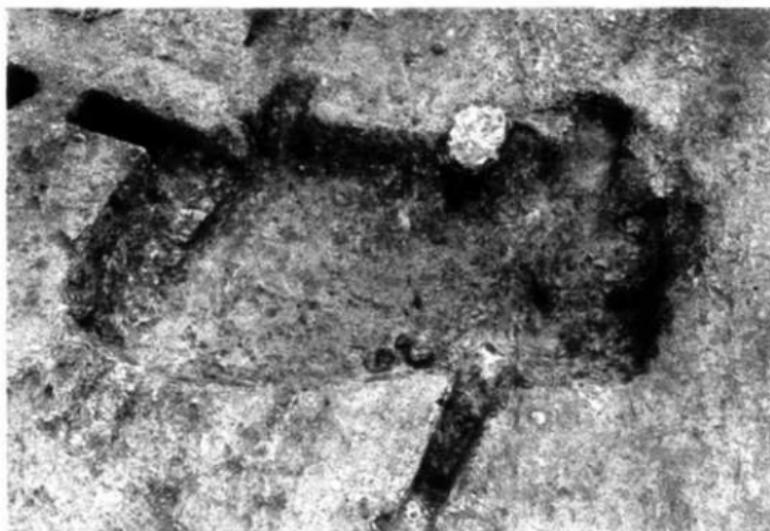


1 面影山89号墳西側周溝断面（北西から）

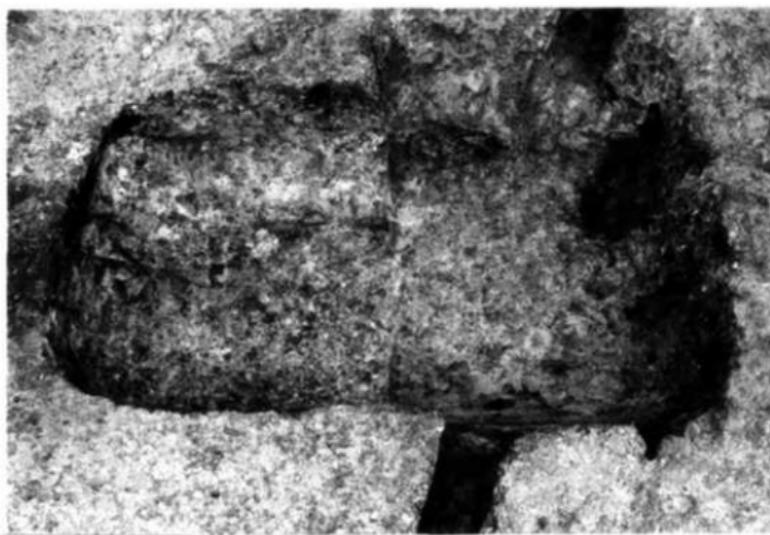


2 同 土壙（土坑）検出状況（北東から）

図版 5



1 面影山89号墳土壤 1 完掘状況（北西から）



2 同 土壤 2 完掘状況（南西から）

図版 6



1 面影山89号墳土坑3完掘状況（南西から）



2 同 土坑4完掘状況（北東から）

図版 7



1 面影山90号墳調査前（東から）



2 同 表土除去後（北東から）

図版 8



1 面影山90号墳西側周溝断面（北西から）



2 同 主体部検出状況（南東から）

図版9



1 面影山90号墳主体部完掘状況（北東から）



2 同 主体部内遺物出土状況（南東から）

図版 10



1 面影山90号墳主体部内遺物出土状況（北西から）



2 同（北東から）

図版11

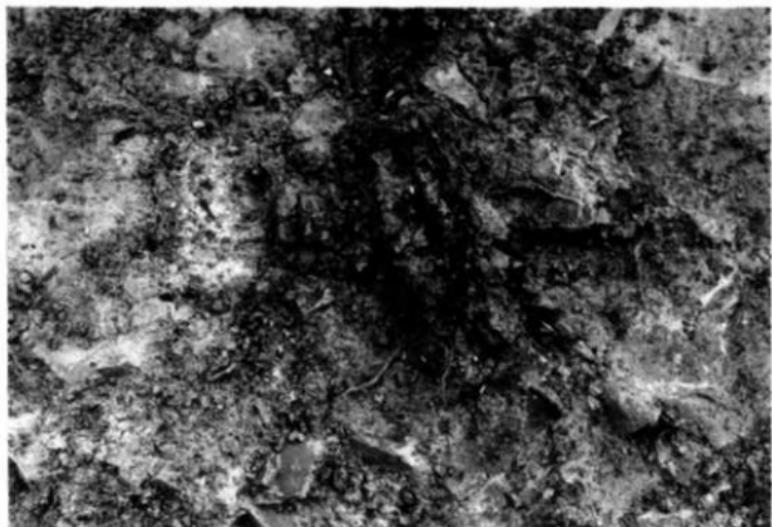


1 面影山90号墳主体部内器台出土状況（北西から）

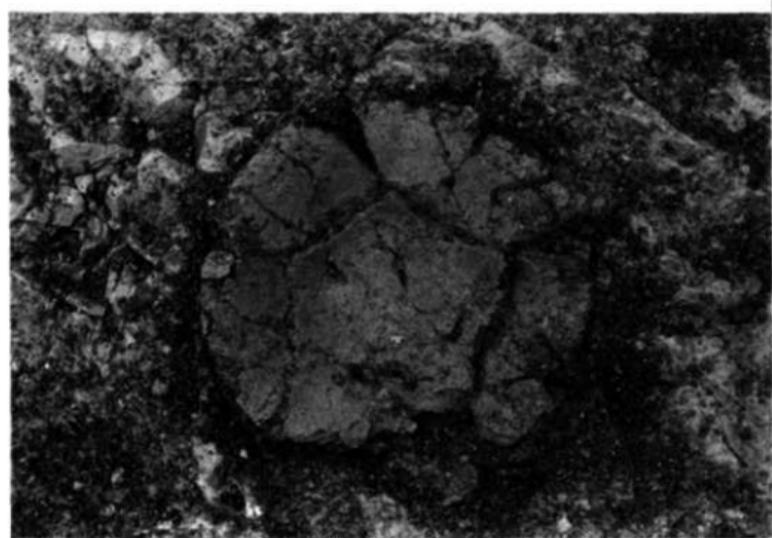


2 同 勾玉出土状況（北西から）

図版12

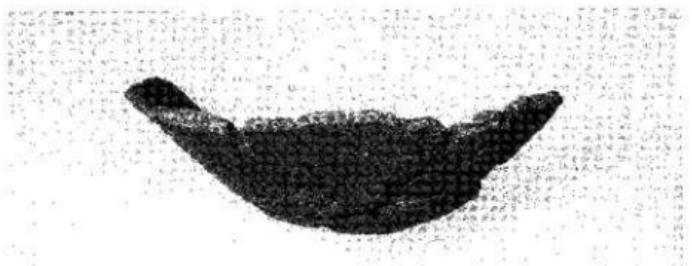


1 面影山90号墳主体部内鉄製品出土状況（北東から）



2 同 高杯出土状況（北東から）

図版13



1 面影山90号墳主体部内出土高杯



2 同 鉄製品



3 同 勾玉

鳥取市文化財報告書 29

面影山古墳群発掘調査概報

平成3(1991)年3月 印刷・発行

編集・発行 鳥取市教育委員会

鳥取市遺跡調査団

印刷所 株式会社 矢谷印刷所